

水沢市埋蔵文化財調査センター調査報告書 第1集

石 田 Ⅱ 遺 跡

1 9 9 5

財団法人 水沢市埋蔵文化財調査センター

序 文

平成5年11月に埋蔵文化財発掘調査と公開展示施設及び研修室等を兼ね備えた水沢市埋蔵文化財調査センターが胆沢城跡外郭南門前に建設されました。

今まで、市内の発掘調査は教育委員会で行ってきましたが平成6月4日より当センターが発掘調査はもとより考古学資料の展示、考古学研修講座等による啓蒙活動の推進を合わせ実施致しております。発掘調査に終わるだけでなくそれらの文化財のもつ貴重な意義について理解し保護しようとするそんな方向にセンターが機能すれば幸いであると考えております。

現在水沢市内には263か所の埋蔵文化財の遺跡が確認されております。更に、平成6年度には8か所を発掘調査致しました。(石田Ⅱ遺跡、中平館跡、熊之堂遺跡、姉体車堂Ⅱ遺跡、常盤小学校遺跡、跡呂井館跡、胆沢城跡、常盤広町遺跡)胆沢城跡を除き7か所の調査は開発計画や個人住宅建設に伴うものであります。埋蔵文化財について従来の考え方は、「まず保護しよう」ということで推移してきたが、現在では「もっと積極的に活用し、整備していくことが必要である」というものになってきています。このような考え方にそって私どもは発掘調査にあたっております。また、そのような主旨のもとに消えゆく遺跡の記録を後世に伝える大事な責務を帯びた報告書であることを自覚し本書の作成にあたりました。

また、速報展により各遺跡の発掘状況や結果については、写真や図で、遺物は展示してお目にかけました。本報告書に掲載されている内容はそれらのものを更に詳細に記録保存したものであります。

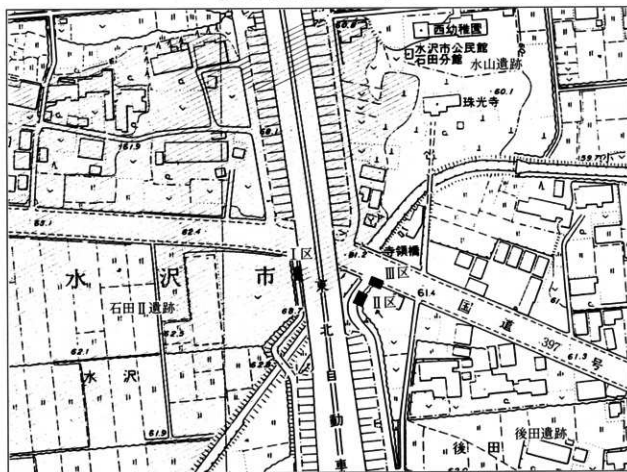
終わりになりますが、水沢市の埋蔵文化財保護行政の推進にあたりましては、今後とも一層の関係各位のご理解とご協力をたまわりますようお願い申し上げます。

平成7年3月25日

水沢市埋蔵文化財調査センター
所長 及川由己



第1図 遺跡位置図(1:50,000)



第2図 遺跡周辺図(1:2,500)

I 遺跡の立地と環境

水沢市の西方、谷底平野(沖積面)と接する水沢段丘の北縁部にあたる標高62~63mの緩斜面に位置する。遺跡南端を小遠堰(乙女川)が北東へ流れる。

東北縦貫自動車道建設に伴い調査が行われた石田遺跡は、奈良時代から平安時代前半の竪穴住居跡46棟、掘立柱建物跡6棟が検出され、水沢市における古代の集落跡の様相が明らかにされている(註1)。この段丘縁にはこのほか西方に寺領遺跡(註2)、小遠堰を挟んで南東に後田遺跡等の古代集落跡が位置する(第1・2図)

今回の調査区はこの石田Ⅱ遺跡の南東端にあたり遺構の存在が推定されたため、NTTケーブル埋設工事に伴い事前調査を行なったものである。

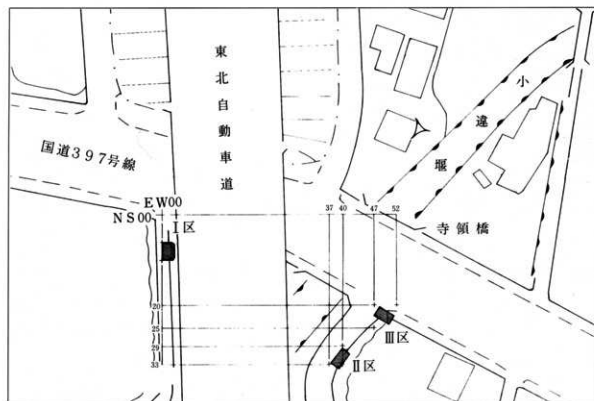
補 注

- 1 岩手県教育委員会「東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書ⅡⅡ」「岩手県文化財調査報告書」第61集 1981年
- 2 水沢市教育委員会「水沢遺跡群範囲確認調査-昭和61年度発掘調査概報-」「岩手県水沢市文化財調査報告書」第16集 1987年

II 検出遺構・遺物

本調査では3地区で調査を行なった。この地区は任意の点から以下のようにグリッドを設定している。

各地の調査結果については以下に記す通りである。



第3図 グリッド配置図(1:300)

I区 旧河道跡

小遠堰の約20m 西側に位置する。現路面下に層厚約1.7mの盛土層があり、その下に旧河道跡堆積層がある。堆積層の層序は以下のとおりである。

- 第1層：黒色土(10Y R2/1~3/1)層。粘性強く、若干炭化物・植物遺体含む。層厚約60cm。
- 第2層：黒色土(10Y R1.7/1)層。粘性強く、若干植物遺体含む。層厚5~10cm
- 第3層：黒色土(10Y R2/1~1.7/1)に細砂40%混じる。粘性弱く、若干炭化物含む。層厚約20cm。
- 第4層：オリーブ灰色土(2.5G Y5/1)層。グライ化。粘性強い。層厚約5cm。
- 第5層：黒褐色土(10Y R3/1)に細砂40%混じる。粘性弱い。層厚約12cm。
- 第6層：灰色細砂(10Y 4/1)層。グライ化。水が湧き出る。層は流路底部(東側)に向けて傾きをもち、3層上層までアシなどの湿地性の植物遺体が入り込んでいる。調査区東側は大小礫の攪乱層である。

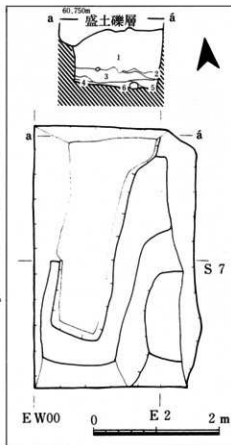
出土遺物

遺物は、第1層から土師器片、須恵器片、馬歯が、第3層から中世陶器片が、第3層と第6層の境から土師器片、須恵器片が出土している。

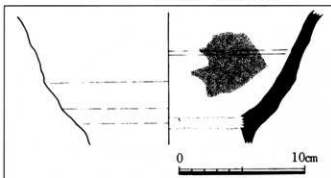
中世陶器 鉢がある。

鉢 第5図は第3層から出土した中世前期(AE1)のものと考えられる常滑の鉢体部片である。体部外面下部はヘラ削り調整を施す。内面には横方向に沈線が入り、漆の被膜が付着している。被膜部分は木口状の道具で掻き取った痕跡が認められる。

(注1) 鎌倉市教育委員会 馬淵和雄氏、平泉町教育委員会 八重樫忠郎氏の御教示を得た。記して謝意を表す。



第4図 I区実測図



第5図 I区出土遺物

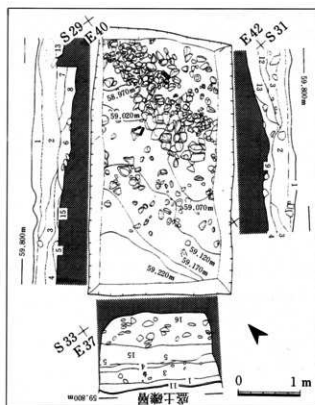
II区 旧河道跡・石組遺構

II区は、小遠川右岸の市道脇に位置する。

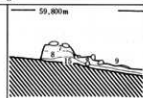
II区の基本層序は以下のとおりである。堆積土は1~4層は黒褐色を呈する水性堆積土層で、5・15・16層は主に砂・礫から構成される旧河床である。

また、川原石群周辺の堆積土層は東壁と西壁では若干異なるが、石組遺構構成層である7~9層は植物遺体を含み黒褐色を呈する。12・13層は川原石群の形成後の堆積層で、川砂・植物遺体を多量に含む黒褐色土層である。

- 第1層：黒褐色土(10Y R2/2)層。粘性強い。
炭化粒少量含む。
- 第2層：黒褐色土(10Y R3/1)層。粘性強い。
黄砂多量、炭化粒若干含む。
- 第3層：暗褐色土(10Y R3/4)層。小礫(径1
~10mm)多量、黄砂ブロック・炭
化粒若干含む。
- 第4層：黒褐色土(10Y R3/1)層。粘性強い。
細砂多量混入。炭化粒若干含む。
- 第5層：オリープ黒色(5Y R3/1)粗砂層。
径3mmの小礫若干含む。
- 第6層：黒褐色(2.5Y R3/2)混土細砂層。
径5mmの小礫・植物遺体を少量含
む。
- 第7層：黒褐色(2.5Y R3/2)粗砂層。粘性
弱い。植物遺体・炭化粒若干含む。
- 第8層：黒褐色(2.5Y R3/2)細砂層。粘性
弱い。植物遺体多量、炭化粒少量
含む。
- 第9層：黒褐色(2.5Y R3/2)混土砂層。植物遺体・小礫(径10mm)多量混
入。石組遺構構成層。
- 第10層：黒褐色土(2.5Y R3/1)層。粘性強い。粗砂多量混入。
- 第11層：黒褐色土(10Y R3/1)層。植物遺体多量に含む。
- 第12層：黒褐色(2.5Y R3/2)混土細砂層。炭化粒・黄砂ブロック少量、
植物遺体多量含む。
- 第13層：黒褐色(2.5Y R3/2)混土砂層。細砂若干、植物遺体多量に含む。
- 第14層：黒色土(2.5Y R2/1)層。粘性強い。
- 第15層：礫層・旧河床上層。礫(径1~5cm)構成層。
- 第16層：礫層・旧河床下層。礫(径10~30cm)構成層。



第6図 II区実測図



第7図 II区石組遺構
立割図

II区では、小遠川の旧河床と石組遺構を検出している。

調査区内の南壁と北壁では28.4cmのレベル差が存在し、緩やかに南から北にかけて傾斜する。この傾斜に沿って流れていたと考えられる川の水を塞ぎ止めるように石組遺構が形成される。

この石組遺構の立ち割りの結果7・8層の堆積を確認しており、7~9層の堆積後、石組に傾斜を付けるため下流の北壁付近では7・8層を掘り込んで川原石を人工的に敷設したと考えられる。

この石組遺構の性格としては、梁場的な施設あるいは足場等が想定される。

出土遺物

紐を通して括った状態の仙臺通寶約100枚が検出された。仙臺通寶は砂層中に埋没した状態にあったと考えられ、全体の遺存状態は良好であった。

仙臺通寶は、仙台藩が天明4(1784)年に領内限り通用の条件で幕府から許可を得て鑄造した銅銭である。脆くて砕けやすい悪銭であり、鑄造許可年限の5年を待たず天明7(1787)年には鑄造を中止している。



第8図 出土遺物

このため今回検出した仙臺通寶も破砕しているものが多く、個体として把握できる検出枚数は約100枚であるが、実際にはこれ以上の銭が括られていたと想定される。

仙臺通寶は、県内では他に一関市大平遺跡(註2)、金ヶ崎町離子沢遺跡(註3)等の近世墓地から出土している。このほか、平安時代の甕片、江戸末～明治期の染め付け破片・土師器細片を検出している。

(註2) 工藤 武「大平遺跡」『一関地区遊水地関連埋蔵文化財発掘調査報告書』1985年

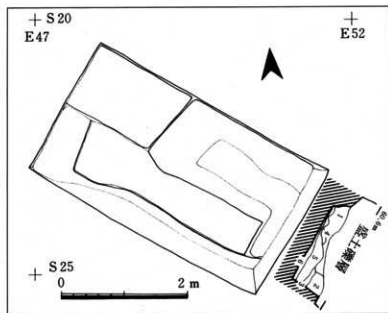
(註3) 千葉周秋「離子沢遺跡」『岩手県金ヶ崎町文化財調査報告書』第19集 1990年

Ⅲ区 旧河道跡

国道397号線南側、市道との交差部分の東側に位置する。調査区の北西部は橋の基礎となっており、実際に調査が可能であったのは全体の約1/2である。調査区北側は緩やかに北に向かって落ち込んでいる。

本調査区の層序は以下の通りである。

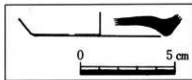
- 第1層 黒褐色(2.5Y3/1)シルト：軟質で粘性強く、緻密。細砂若干、植物遺体と見られる炭化物多量混入。
- 第2層 攪乱礫層。
- 第3層 4層より黒味がかかる黒色シルト：やや固く締まり、粘性強い。下層は、一部に細砂10%混入。
- 第4層 黒色(10Y R2/1～1.7/1)土層(漸移層)：細砂40%混入。軟質で粘性ほとんどなし。
- 第5層 黄灰色(2.5Y4/1)細砂層：やや軟質で粘性なし。上層にぶい黄褐色(10Y R4/3)を呈する砂層混入。
- 第6層 黒褐色(2.5Y3/2)粗砂(砂利)層：軟質だが粘性なく、脆い。湧水層。



第9図 Ⅲ区実測図

出土遺物

遺物は、近世のものと考えられる底径7.4cmの素焼きの鉢もしくは小鉢底部片である。底部外面は高台を削り出している。



第10図 Ⅲ区出土遺物

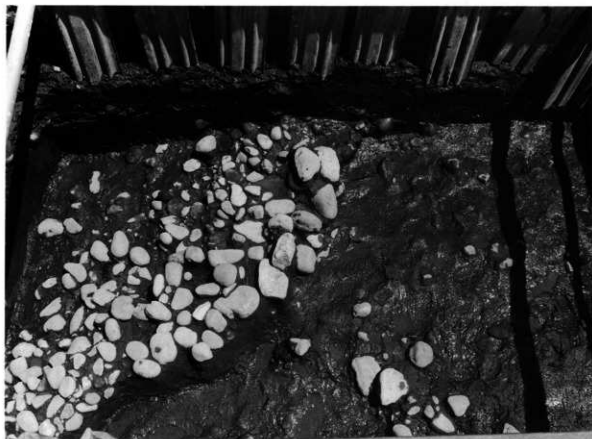
Ⅲ ま と め

小遠川は、現在は兩岸の整備により直線的に流れているが、地元の人々の話では30～40年ほど前は曲がりくねった流路であったということである。今回の調査結果からその様相は江戸時代にまで遡ることが明らかとなった。Ⅱ区で検出された石組遺構は、この時期の人々の小遠川の利用状況を伺うことが可能な遺構である。また、Ⅱ区から検出された仙臺通寶は、石組遺構に接して検出され、しかも紐で括った状態であったことから、地鎮等に伴う埋納物といった意味合いが想定される。

Ⅰ区からは中世前期の常滑鉢片が出土しており、周辺に該期の遺構の存在が予測される。従来の方布調査では、中世に属する遺跡は知られておらず、今後の調査に課題を提起した。



図版1 上 I区全景(南から)
下 II区全景(南から)



図版2 上 II区全景(西から)
下 石組遺構立割状況

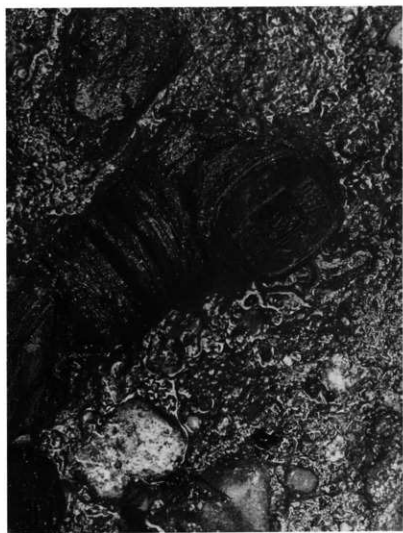


图版 3

上 II区黄壁断面图(西カ5)

下 II区南壁断面图





圖版 4 上 仙臺通實檢出狀況
下 仙臺通實近景



図版 5 Ⅲ区全景(南から)

水沢市埋蔵文化財調査センター調査報告書 第1集

石田Ⅱ遺跡

平成7年3月31日発行

発行者 財団法人 水沢市埋蔵文化財調査センター
〒023 岩手県水沢市佐倉河字九蔵田96-1
TEL 0197(22)4400 FAX 0197(22)4600

印刷所 有限会社 あべ印刷
TEL 0197(24)8303 FAX 0197(24)8330

